
愛しいとおもう

りょん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

愛しいとおもう

【著者名】

りょん
【あらすじ】

たつた一瞬のことだった。一目惚れだった。

それから8年間の間ずっとくすぶっていた初恋は、どうやら叔父にバレバレだったらしい。彼の国に嫁げるようそれとなく叔父が父に進言するも、父はある条件をだした。「身分にとらわれずお前を愛するような懐がでかいやつじゃないと娘はやらん。」ちょっとまで。どこの親ばかだ。と思うも、叔父は楽しそうに準備を進める。母親も乗り気だ。一般的な茶色に髪を染め、低い身分の貴族に偽の籍をおかげ、側室候補としてござまいる。ほんの一部の人しか心を開か

ない王と無表情の女の甘い恋愛ストーリー。

第一話 初恋（前書き）

はじめまして。自分が読みたい設定をつめこんでしました。よろしけつたらのぞいていくください。

第一話 初恋

それは一目惚れだった。

でたくもない王国創立祭にでて、多少なりとも不機嫌だった私は、お祝いをしにやってきた各国の王族たちが次々と私たちに挨拶するのを横目に何気なく周りを見渡し、ふと同い年ぐらいの男の子に目を留めた。

ただ単に同い年そうだなと思ったことと、とても不機嫌そうな顔を隠しもしていないことに興味をもつたからだった。

私はこのとき11歳だったのだが、この年になると、自分の態度が周りにどんな影響が与えるのか自然と分かつてくる。だがそんなことを微塵も気にしていない男の子が、妙に羨ましかった。

(私もこの創立祭は面倒つておもつてますよ)

今、私と彼は同じ感情を共有しているみたいでくすぐったかった。

今さつきまで不機嫌だったことも忘れ、少しづつわくわくとさえしながら、彼を観察し始めた。

といつても常日頃無表情な私は、不機嫌に思つていようとわくわくしようと、その感情を悟られることはめったにない。唯一家族だけは何気なくわかるらしいのだが。

妹も私と同じようにあまり感情を表に出さないので、よく両親やメイドたちが困った顔をしていた。

彼は、深い蒼色の少々短めな髪をぐしゃぐしゃとしながら隣にいるお付きの人？らしき人に、なにか話しかけているが、お付きの人はニコニコしながら頭をふっている。

イライラとしている男の子を見て、お付きの人は不意に誰かをよんだ。すると男の子はわたわたとして、おつきの人を見ている方向へ走っていく。

そちらに目を向けた瞬間、私は周りの景色がキラキラと輝いている

かのように見えた。

さつきまで不機嫌顔だった男の子が、とても、とてもきれいで笑っていた。

弟、なのだろうか。3歳ぐらいの可愛らしい男の子がよたよた歩いてくるのを、満面の笑顔で出迎えている。

表情の鮮やかな変化に思わず目が奪われた。

あんな笑顔をしてみたい。

思わずそんなことを思つほど、その笑顔は魅力的で、引き込まれるようだ。

鼓動が早くなるのを感じる。顔が赤くなつていくのを自覚すると同時に、男の子の顔を見ていられなくなつて思わず目を伏せてしまった。

ビヤビヤと、胸が高鳴つてこる。

この現象はついこの間、メイドのアンナに教えてもらつた。

ある本を読んでいるときに、その中に書いてあつた「恋に落ちる」とはどういうことなのかを聞くと、アンナは満面の笑顔で

「胸がドキドキ高鳴つて、その人の顔が忘れられなくなつて、その人のことしか考えられなくなるんですよ」

と教えてくれた。ビーナンナも恋に落ちてる最中らしい。

この時だけは、私はいつもの無表情が崩れていた自信がある。ビーナンナはみんな両親のほうに顔を向けてるので、だれも気にもしていないだろうが。

少しあつて気持ちが少し落ち着いてから、横田でまだ同じ場所に男の子がいることを確認し、自分の横で退屈そうにしている叔父様に男の子のことをきく。

すると「ははーん・・・」ヒーヤーヤされたあとで、隣の国の、ヴィングリー國の王子だと教えてもらつた。

ヴィングリー国。

縁と山に囲まれた国でとても豊かだが、それゆえに付近の国から田を付けられているらしく、それに対抗するために軍の規模も大きいとの前の授業で習つた。

その国の王子なのかとぼんやりと考えてこるついで創立祭も終盤となり、次々と貴族や王族たちが帰つていく。

はつと気がついたときには彼も、付き人も、彼の弟らしき人もいかつた。

ああ、いつてしまつた。

その時はとても後悔したのを覚えている。

どうせ話しかける度胸もないくせになにを後悔するところのか。

それから8年。

私は初恋を忘れることもできず、しかし行動を起こすこともなく、たんたんと生活を続けている。

ただ、初めての恋をしたあと、叔父が面白半分で教え始めた護身術

に私はすっかりはまつてしまい、気が付けば剣と体術で、男たちをあしらってしまうほどの実力をつけてしまった。

騎士団の

なにをどう間違ったのか・・・。謎だ。

そして今日、私は嫁ぐ。

初恋の彼のもとへ。

第一話 嫁ぐ？

始まりは叔父の「一言だった。

「シルヴィはまだヴィングリー國の王子が好きなの？」

この日は、諸侯国の動向を監査するところ建前で、様々な国を放浪してまわる自由気ままな叔父が一年ぶり帰ってきたため、稽古をつけてもらっていた。

叔父の「」の言葉は、私をどうせせるには十分な言葉だった。

「隙あり！」

その叫びと共に、木刀が頭にあたる寸前で止まった。

「な、ななな。」

私は叔父に負けたことすら気付く余裕もなく、なんぞ知っている！と叫びそうになつたが、そういう子のことを教えてくれたのは叔父だったと思い出して脱力した。

「ひむ。シルヴィはまた強くなつたね。ちよつと冷や冷やしたよ。」

あっけらかんにつぶやく叔父・・・私の父の弟である・・・は私の驚きふりに、私がまだ彼のこと好きなのだと察したらしく。

「恋歴8年か。年季はいってるね。」

ほつといてくれ。

「君たちが恋に落ちた瞬間を見た僕としては、なんとか君たちをくつつけたいんだけどね。あっちもいろいろ大変だつたみたいで、僕としてもこんなに時間がかかると思わなかつたんだよ。」

「？なにそれちがひこいつているんだ？」

なにやらぶつぶつこいつている叔父についていけず、滴る汗をぬぐうためにタオルをとりにいく。

風呂でもはっこりこいくかな・・・と思つていて、

「ナビちゃん君は一歳にしてお嫁にいけるよ。よかつたねえ。」

叔父が突然爆弾発言をした。

「・・・は？」

普段無表情な自分の顔がぽかんしているのがわかる。

「こまヴィングリー国が側室候補を募っているんだ。王が国同士の

戦争をなんとか終わらせたらしくて、周りの大臣とかが、今度は世継ぎ世継ぎうるさいらしいよ。まだ王になつて2年なのに色々と大変だよね彼も。」

まだ頭が混乱していて、でもふと疑問が浮かぶ。

「・・・なぜ候補？」

「王と大臣が互いに譲歩した結果らしいよ。王はまだいいと言い張つて、大臣はとりあえず側室だけでもと縋り付いて、結局大臣の粘り勝ち。とりあえず王が気に入つた人を側室なりあわよくば正室なりにしてくれたらよしとなつたらしい。あそこの大臣たちも悪くない人たちなんだけど、いかんせん王への愛が強いんだよね。うん。ちょっと曲がつてるけど。」

彼が王となつて2年。即位してすぐにヴィングリー国は両隣の国から攻められ、それがようやく最近になつて収まつたらしい。うちの国も影響が過多になりすぎない範囲でヴィングリー国を支援しているのは知つていたが。

私の国は、覇権する国を簡単につくつてはいけないから。

本当はすぐにも飛んでいきたかった。なにか力になりたいと。

けれど私はこの国の姫で。彼とは一回も接触すらしたこともなくて。そんな状況で動けるわけもなく、ただただ悔しい日が続いた。

戦乱がおさまったことは安堵していたが、次は后か。大臣たちの気持ちはわかるが少し早急すぎる気もする。

彼は大丈夫だろうか。

ちゃんと休めているのだろうか。

「ほらほら、恋する乙女の顔になってるよ。そんな顔はほかの人にはみせちゃダメだからね。」

私の無表情から表情を読み取れる人なんてなかなかいないし、第一そんな顔をした覚えもない。

むつとしながら叔父を見つめると、そんな私の考えを読み取ったのか

「初恋しかしたことないから鈍感なんだわ！」ねめつ。

といわれた。悪かつたな初恋歴8年で、未練たらしくて。

「ところがそれでなんが嫁ぐ話になる？」

「うーん、まだ今から兄さんに提案するんだけどね。シルヴィだつて19歳だからそろそろ結婚の話がでないと、さすがにおかしいだろ？ 大丈夫、シルヴィがずっと彼のこと好きだったとかは言わないから」

まあそれは最近不思議に感じていたが。

私が武術を習うことはなんとか黙認した両親も、結婚にはいろいろいくつくるだらうなと思っていたら、なにも言つてこないし。

武術を習わせてくれるから、ほかの作法も少なくとも、嫁にだすことに両親が恥ずかしく感じない程度には頑張つたつもりだ。

妹のシェリーには負けるが。

彼のもとに行ける。

それはシルヴィを甘く痺れさせる。

それは恋に落ちてから何ども願つたことで夢のよつた話だつた。

けれど口下手な自分は、ただでさえ自分が恋に落ちたことを誰にもいえず、恥ずかしさともんもんとした思いをずっと心の中にじめてきた。

でも、叔父は私が男の子のことを見たときから、私の恋を分かつていたとは……。

今更ながら、恥ずかしくうわー…としてくる。

「はいはい。脳内会議はそこまでね。兄さんといひこーじー。」

「え、今から？」

お風呂入りたいし、着替えてから……。

「今のふわふわしたシルヴィを見せたほうが効果あるしね。」

叔父がぼそつといつた言葉の意味が分からず、私は叔父に背を押されつつ、父のもとへと向かつた。

彼に会えるかもしれないという期待から、少しだけ頬が熱いのを感じていたが、とくに自分の表情にかわりはないだろうとおもつていた。

(うわあシルヴィーの体中に花が咲いてる。)

と叔父に思われていたことも、叔父でさえ気付く私の変化に家族が気づかないはずがないことも、なにも気付くことなく、私ははたから見ると無表情のまま、心はつきつきで父のもとむかつたのであった。

第三話 父がひつした

「だめだ！」

一喝。父の声が部屋に響く。

父が大声をあげるほど反対することに驚いてしまう。

さすがにそういうた話は今までなかつたため、父がどういう反応をしめすかわからなかつたが、ここまで怒るほど、私は両親にとつて嫁にだと恥ずかしい存在なのだらうか。

「ちょっとあなた、シルヴィの周りのお花がしほんでるわよ。あなたがせいいで。」

母が意味不明なことを父にいふが、父には通じたらしく、ぐつとだまりこんでしまつた。

かわりに母が私の方をみて優しく問い合わせる。

「シルヴィは側室候補としていくことに納得しているの？」

優しげな瞳をみて、私はたゞたゞしくもいった。

「・・・はい。父と母が許されるのであれば。」

私はただひつそりと彼を見ることができれば、それでいい。

お嫁さんになりたいと考えたことはなかつた。

自分が誰かの妻となる未来を想像したこともなかつた。

いつかはするだらうと漠然と考えていたし、こんな面白みもない自分を娶ってくれる人がいるかもわからない。

ただ、この8年願つたのは彼に会いたいといつことだけだった。

「・・・いいだらう。しかし一つ条件がある。」

真剣な顔で父は私を見据えるので、私も自然と背筋を正す。
なにか、問題でもあるのだらうか。

「そいつが、身分にとらわれずにお前を愛するような、懐がでかいやつじやないと私の娘はやらん!」

鼻息荒く面倒見る父をおもわずぽかんと見つめる私。

あらあらと笑つてくる母。

「あ・・の、私はただ候補として参加するだけですし、この国からきたってことは隠すつもりなので、娶られる確率は低いかと・・・。」

「あ・・の、私はただ候補として参加するだけですし、この国からきたってことは隠すつもりなので、娶られる確率は低いかと・・・。」

私の国はちょっと特殊なので、この国の姫がだれかの側室候補になるなど知られたら、ちょっと騒がしこになってしまつ。

それだけは避けたい。彼に迷惑をかけるようなことはしたくない。

「いや、そのだな・・・つまり・・・。」

いやに歯切れが悪くなる父。その父の言葉にかぶさるよつて母が声をあげた。

「シリヴィ、わたし思いつきましたわ。」

母がキラキラと皿を輝かせていつてきただこと、少しだけ嫌な予感がする。

「身分が低い貴族になりすまして行つたうづつかしさ。」

ああ、母の暴走が始まった。

母は小さい頃から、「みぶんさもえ」やら「すれちがいのちあまあま」などが好きらしい。

「身分が低いほど障害があるから、それを乗り越えるほどの人だつたら、この人も結婚を許すでしょうし、シルヴィもだれかの貴族の名前を借りるつもりだつたんでしょう。だつたらいつそのこと身分が低い貴族としてのりこんでいきなさい。」

「まあ、義姉さんの少女思考はおじといて・・・いい考えだと思うよ。シルヴィだつたら多少のこわいでも止めあげる技量をもつてゐし。」

多少のこわいでもなんですか叔父よ。

母も田をキラキラさせないでください。

父もうむ。とかいつてないでなにか言ってください。

「ならシルヴィの髪は目立つから一般的な色に染めて、服も地味目なドレスをそろえて、身分が低い貴族の戸籍を新たにつくつてああ忙しくなるわ。」

いきいきしている母は可愛いのだが、私が口をはさむ隙もなく次々と決められていくため、どうしたものか・・・とため息をつく。

「行けることが決まってよかつたね。これから楽しくなりそうだ。」

と叔父が私に話しかける。

妹がこの場にいたならば、もう少ししましな話し合いができるだらう

やつ黙つてしまふであつたの緊つである。

「シルヴィはや、今うだけで満足できるの?..」

叔父はまことに小声で話しかけてくる。

「へ~でやる・・・と想つが。」

今まで思つてゐたのがことこの貯持しだったのだから。

はてなマークを浮かべる私の頭をあつへんなでながら

「・・・恋愛はそんな簡単に満足できるものじゃないんだよ。」

と叔父は意味深な言葉を残すと、やつへり部屋から出てこつたので
あつた。

やつの言葉がわかるのは、彼と会つたのひどである。

第四話 つじてきたる今日

そして今日、とうとう側室候補として、ヴァイングリー国に入った。

準備はあつと、う間だつたといつが、主に叔父と母がノリノリで進めていくため、なされるがままだった。

戸籍を偽って他国の側室候補になるなど、普通の国なら許されないだろう。

ただ、この国は、なんというか、許される……といつわけではないんだが……なんといつていいのやう。

まあとにかく、鍛錬する暇もなく礼儀作法を見直し、地味なドレスをつくるために採寸をし（なにか違うよつた）、新たに戸籍がつくれられた貴族の設定を頭にたたきこみ、父からなにやら細々といわれ（嫌になつたらすぐに帰つてこい。すぐに跡形もなく消してやるから。などと）薄ら寒いことをいわれたので、絶対に父には報告などできないなと思いつつ、今日がきた。

今日会える。

やつと会える。

ちょっと型の古い馬車に乗り（わざわざ作らせたらしげ・・・・）、
王城前の門をくぐる。

私の国からヴィングリー国まで一日かかり、その間、緊張にじくじくと熱くなる体を抑えきれず馬車をとめて休憩している間、森にて居合切りをして、気持ちを落ち着かせた。

これから側室候補となる女がすることではないと分かっているが、
これが一番落ち着くのだ。

そして門を抜け、馬車を降りてから、大部屋に案内されるとそこは

女性の大群がまつっていた。

顔が思わず引き攣る。

みんなきれいに着飾つていることからどうやら側室候補として集まつたらしい女性たちだとわかる。

それぞれ顔見知り同士でグループが出来ていて、笑っている顔から想像もできないほど辛辣な言葉が行き交っている。

ここはすでに戦場なのだ。

けれど王はまだここに。

と周りを見渡すと、ふいに視線を四方から感じた。

視線があつた方を振り返ると、そこには女人たちの、差別剥き出しの表情があつた。

「なにこの地味なドレス。流行遅れどこのじやないわよね。」

「いかにも身分が低い貴族が、精一杯伸びしましたーって感じ。」

「うーん、母の『アドレスのコンセプトを聞こ聞いてこる。

なにやら、蔑まれているのは感じるが、いかんせんなにも感じないのはいけないのだらうか。

いつも荒くれ共と鍛錬しているせいが、そういう女たちの嫌味などが通じないとこうか、初めて言われたので逆にすゞることと思つてしまふ。

この経験はやはりしないといけないと思わず感じてしまった。

上に立つ者まず、どんな立場をも知り、その立場に立つて考えるのだと父は常口頃話していたのだがそういうことなのだと考える。

やはり、今回の母の提案はよかつたのかもしれない。

そう思つてみると、こきなり、女たちのおしゃべりが静まつた。

なんだ?と思つて振り返ると、部屋の中で一段高く作られてみるところに、誰かが座つていた。

あ、れは

ぶわっと鳥肌がたつかと思つた。

彼がいた。

8年といつ年月を経て、たくましく、とてもかっこよくなつた彼が。
・
・

王としての存在感があり、彼がいるだけで空気が重くのしかかる。

ああ、あの男の子はこんなにもすばらしく成長したのか。

あまりにも長い一瞬だった。

「よくぞまこつた。側室候補の方々。」（ゆるつじやいわざよ。）

その声は、低いバリトンで、聴くだけで体がぞくぞくとじんぐる。
何ども想像した男の子の声は、成長した男の声にたちまちかき消される。

「ここからでは小さくしかみえない王はそれだけこうと、せりと立ち上がり、ふつうとため息をついて部屋からでていった。

やがて、女たちはそれぞれの部屋に侍女たちと向かつ。

「わらわ行かましようか。」

と同行してくれたアンナがぼどいすために部屋へと案内されるままに進む。

この気持ちは一体何だひつ?

頭がぼうっとする。

恋に落ちたとき、鼓動はじくじく音を立てていた。

今は成長した彼を思つたびに、とくとくと大きく胸が鼓動をひつ。

念えるだけよかつた。

8年も会つことなく、ただぼんやりと初恋の人として思い続けた。

会えたならにか、このじがらみともいえるものから開放されると思つた。

なのに、

もっとじがりみが、からみついたかのよつて細べるのはなぜだらうか。

第五話 誤解

私はあの日から少し変だ。

会えるだけでよかつた。

それだけで、よかつたはずだったのに、私はもやもやとする気持ちが抑えられなかつた。

あの日から一週間。

私は彼にあの日以来あつていない。

レンゲルド・スティーンボルグ

彼の名前だ。

自分の国にいたときは、「この名前を口にする」とはほとんどなかつたし、心の中でそつと名前を復唱するのみだつた。

しかし今は

「レンゲルド様は昨日私の部屋にこられたわ。」

「まあ、私は昨日の昼にレンゲルド様からじきじきに声をかけられましたのよ。」

「私は今日の夜のお約束をしていただきましたわ。」

といいかじこでその名前が言われている。

いろんな人の話が聞こえてくるたびに、キリキリと胸が痛くなる。

一体私はどうなつてしまつたのだろうか。

こんな痛みはしらなかつた。

ドロドロとした、気持ち悪い欲が溢れてくる。

自分が自分でなくなつてしまつようで怖かつた。

私も、レンゲルド様にお会いしたい

彼の声を初めて聞いてから一週間。

女人たちは、みんなレンゲルド様にお会いできているが、私は後
宮の中を歩き回ったり、庭にでたりしても一度もお会いすることが
なかつた。

どうやってお会いしているのだろうか。

とつあえず行動しようと思い立つてはいたものの、なかなか事はうまくいかないものなのだと落胆する田々。

身分の低い貴族のつながりは欲しくないらしく、まだ私は女人の人たちとあまりしゃべったことがないため、レンゲルド様の情報も分からず、どうやつらかと考えながら、今日も散策を続けていた。

一時間ほど、のんびり歩いていたとき一緒に散歩に付き合ってくれたアンナがふと、立ち止まつた。

「なにか、叫び声のよつなものが聞こえてきませんか？」

え?と思ひて立ち止まつ、耳を済ます

「…………やめひーー。」

「…………やめひーー。」

聞こえた！

と同時に走り出す。

ドレスはこんなとき本当に邪魔だ。

幸いにも愛剣はアンナが袋に入れて持つてくれていた。

うん、今日立たない場所です、ふりをしようと思つてもつづきとい
てよかつた。

少し走ると、そこには一人の女の子が男一人に囲まれていた。

男たちは腰に剣をぶら下げていて、女の子の手を引いている。

「あら？ あの人たちは……」

とアンナのつぶやく声が後ろから聞こえたが、意識は既に前方へとむいていた。

気づかれる前にかたをつけようと、さらに加速し、愛剣の袋と鞘をそこらへんに投げる。

一人の男がこちらをみて驚いた顔をするも、もう遅い。

すかさず剣の柄の部分で殴り倒し、もう一人の、女の子の手を引く男の首先に剣先を突きつけた。

「女の子に、少し乱暴なのではないか？」

無表情が相まって、剣で迫る私の顔はそれはそれは怖いらしい」というの団員がいつていたが、この男も顔がすっかり青くなっている。

さて、女の子のほうは……とみると

キラキラと田を輝かせていた。

え？

「お、お姉さまかっこいいー！……！」

「姫様！なにか誤解を受けられているようなので説明をおねがいしますよー！」

剣先を突きつけている男がなにやら女の子に懇願している。

あれ？君、無理やり連れていかれそうになつたんじゃ・・・

「お姉さますつじこかつによかつたんだけど、この人たちが私の護衛たちなの。勉強部屋に連れて行かれそうになつて抵抗してたの。」

あっけらかんといつ女の方に田が点になり、慌てて剣を離す。

もう一人のほうをみると、完全にのびていた。

「れは・・・やばいんだじゃないだらうか

「あらやはり王都騎士団の方たちですわね。」

「アンナまでのほほんと言つもんだから、なんだか肩の力が抜けてしまう。」

「も、申し訳ない。叫び声が聞こえたもので。」

とこうと、男は苦笑気味に

「いや、誤解を受けても仕方なかつたでしょ。それより、見事な剣さばきでした。」

といわれたため、思わず困惑してしまつ。

ドレスを着た女性が、後宮近くからきたといふことで、側室候補だといふことはバレバレだらう。

なのにその候補が剣を振り回し、到底貴族の女のすることではないような勇ましい様子を見られては、ますます側室候補などふさわしくないと思われ、この王宮から出されるのではないだらうか。

顔が青くなつていいく（無表情なので男は気づいていない）が、男は

怒っている様子もないし、見事だと褒めてくれた。これは素直にありがとうと言つべきだらうか。

「もしよかつたら、騎士団の訓練所をみにきませんか？」

「これは突然のお誘いだつた。

「剣を持っていたところ」とは、どうかで訓練でもするつもりだつたのでしょうか？」

「う、鋭い。しかし、貴族の女が訓練所にはいるなど、騎士達の邪魔になるのではないか？」

そう思ふとしてみると

「では騎士の見習いの服を貸しますよ。僕と一緒にくれば、僕付きの見習いと思われるでしょう。なにより、あなたの剣をばきを見てから、僕も含めて、うずうずしそうな男たちが沢山ありますので、ぜひ見に来てください。」

「どうやら、見習いを付けることができるほど位を持つ男のようだ。そこまで言ってくれるのならばそのお誘い、乗るとするか。

「では、ぜひ。」

この訓練所での訪問が、のちに事態を急速にはやめていく結果となつたのだが、今はまだ知るよしもない。

第六話 やはり鍛錬はいいな（前書き）

たくさん的人にみていただき、お気に入りも400件をこすほどしていただき、大変感激しています。ありがとうございます。

第六話 やはり鍛錬はいいな

騎士見習いの服に着替えるとさっそく訓練所の中に入る。

田の前を歩くのはシイーリー・ギルフィルトといって、私を訓練所に誘ってくれた男だ。

なんせ自分の国の訓練所には毎日入り浸っていた私だが、他国の訓練所を見るのは初めてだ。

自國にはない訓練方法や訓練に使用するモノを見ては思わず興奮してしまつ。

無表情なりにも頬がほんのり赤くなるのを感じる。

やがて人がたくさんいる広々とした広場にでると、木刀同士でぶつかり合う音、体術のみで互いを倒そうとする男たちなどが汗を垂らして行なっていた。

「やあシイーリー、ずいぶんと美しい騎士見習いだね。その子剣をしつかり持てるのか？」

声がかけられた方みると、体が人一倍大きい、茶色の髪を短く刈り込んだ男がたつていた。

こちらを見ながらふんっと笑った彼は、『ひつやら私が脆弱であると見た目で決めつけているらしい。

なんと久方ぶりな嫌味だろうか。

私が姫であることをかくして下町に行き、強盗など悪事を働くものたちを騎士団よろしく懲らしめようとした際に、よく言われたものだつた。

そしてそんな輩には実力を見せることが一番効果的な手段だった。

思わずシャーリーを見つめると、

「彼も私とおなじく、ゾクゾクするタチですので、ほゞほゞにしないとストーカーのように追いかけ回されますよ。」

ヒーッ『ツツ顔で』こので少し引いた。

だからなんだゾクゾクするとは。

「……はあんたがくぬよ! なと」じゅねえよ。見学飯分なら帰んな。

」

といやいや顔でいわれては、こちらも正しくひけない。

私はつまり喧嘩を売られたのだ。喧嘩は売られたら買つものだと叔父から教えられた。

そしてタイミングを見定めることが大切だとも言われた。

「うむ、お前が売った喧嘩、受けたとひ。

「こんな女に負けたは貴様も恥ずかしいだらう。お前がこうなれば見学で勘弁してくれ。」

まず、売り言葉には買い言葉で応答すべきである」と。

そして相手が怒つたら素早く体勢を整え、迎撃準備にひしむ」と。

逆上してすぐに切りかかってくる不屈きものもいるからな。

しかし、この男はそこまで礼儀がひどくはないらしい。

男は皿をギラギラとさせ、木刀を握り締めながら

「はっ！口だけは達者なんだろうが、俺は手加減はするつもりはねえぞ。動けなくなつてもしらないからな。」

と、応戦する意思を示した。

「うわうわよろしく頼む。手加減したせいで負けたとほざくものもこるのでな。」

空気がピッコロとする中でシィーリーだけはこいつ笑っていた。

この男、性格が叔父と似ている気がする。

たくさんの騎士たちが集まり、興味深そうに私と、喧嘩を売つてきた男を見ている。

「ゲインは第一師団の副師長だぞ？ちょっとやばいんじゃないか。」

「あの嬢ちゃん、ただじやすまねえんじゃねえか。」

などと周りの騎士達はなにか言つていたようだが、前を見すえてゲインとやらに意識を集中させる。

はじめ！

その声とともに、少々殺氣を含ませる。体を瞬発的に前へおしだし、ゲインの懷へといぐのにかかる時間は一秒弱といったところか、だいぶ体がなまつていいよつだ。

愛剣ではなく木刀なので、まだ馴染んだ感覚はしないものの訓練用に使われる木刀なためか、随分と扱いやすい。

そのまま喉元に木刀を向けよつとしたが、さすが副師長なだけはある。

即座に自分の木刀で防いだようだ。

カーン！と木刀特有の衝撃音が広場に響くも、このとき既に私は半

回転に体をひねり、回し蹴りの体制につなげていた。

ゲインはどうやら、木刀でとめるので精一杯だつたらしく、ガードがまつたくされていない。

その結果、回し蹴りは見事ゲインの頭にクリーンヒット。

そのままドーン！…という重低音とともにゲインは地に伏した。

もちろん木刀を喉元におくことも忘れない。

一瞬の隙が命取りになってしまつからな。

しかしこの男、なかなか見込みがある。

そんなことを思いつつ、周りをみわたすと、あたりは静まり返つていた。

なぜこんなにも静かなのだろうか。

騎士達を見ると、みんなそれぞれ目を大きく開かせて、口がわなわなと動いていた。

多少はなにかしゃべってくれ。なにかいただまれないぞ。

「どうした？」

騎士達を見回しながら、私がそう問い合わせた途端、一瞬のうちにわ
つと声があがり、その声の大きさに驚いて私は思わず体をびくつと
震わせたのだった。

第七話　Hはいざる？（前書き）

もうすぐシルヴィ編は最終回です。
はやくレンゲルド編で隠してある部分を書きたいです。
お気に入り件数が600件を突破・・・だ・・・と?
みなさまにハグしてまわりたいです。
ありがとうございます。

第七話　何はござレ?

それからのことは本当に大変だったといわざるをえない。

暑苦しい男たちが雄叫びをあげながら、次は俺だの押すな俺からだのもみくちゃになる様子はまさに混沌と言えよう。

ゲインは、一時突然と寝転がつたまま、**田**を見つめていたが、いきなり飛び起きたと、私の手を取り、片膝をついた。

あーあ・・とシィーリーの声。

なんだか嫌な予感しかしないんだが・・・と思つていると

「あんたの蹴りに惚れた。一生付いていく、いや一生お共にしてく
れ。」

とキラキラと~~田~~の子供だと~~田~~を輝かせていつものだから
こつちは全力で引いてしまった。

なんだ一生とは。どうしてひと足飛びいか何足もとんで一生お供するなんて決断ができるのか。

お前の一生をこんなあつたりきめていいのかゲイン。

そして周りの奴らも~~田~~、一生下僕発言でた~~田~~などと騒が

ないでいただきたい。

とりあえず返事は考えとくところの拒否で、いつたと騒ぎを落ち着かせ、あらためてほかの騎士たちと対決することになり、とても充実した時間を過ごすことができた。

さすがにここまで騒ぎが大きくなつては、側室候補の女だとばれるのも時間の問題と思うので、訓練所の参加は今日限りにした。

ほかの騎士達には、シィーリーに適当にまかしてもいい。

まあ騎士見習いの服をきて、髪を後ろで結んでいたため、側室候補だとはすぐにはバレないだろうが。

レングルド様にはけっこう会えなかつたが、側室候補の滞在期間は一ヶ月もある。

のこり二週間もあるなんら、簡単にみつけられてしまうと思っていた。

が、どうせ考えは甘かったらしい。

「さうにきてあつとこうまに三週間もたつてしまつた。のこり一週間をきつたところに、私はまったくレンゲルド様に会えずについた。

ほかの側室候補はみんなレンゲルド様にお会いしていふので、なぜ私だけがお会いできていないのだろうと、少なからず落ち込んだ。

毎日、レンゲルド様を探す散策の旅をつづけていたのだが、騎士達に遭遇する「めんどくさい」となるため、散策範囲が大幅に軽減してしまつたのもひとつ的原因だと思う。

「夜会の衣装はもう決まりました?」

「ええ、光沢のでた最高級品のものをわざわざ国からもつていれましたのよ。」

「それより、その夜会には、かのシユバルティ帝国のルドヴィリー様がお目見えになるとか。」

「まあ……それではますます夜会に向けて気合をいれねばなりません

と、会話から察するとおり、最近の側室候補の方々はすっかり夜会の準備に忙しいようだ。

もつすべ側室候補たちは、レンゲルド様にお日付された人以外は自分の国に帰ることとなる。

そのために、大規模な夜会が国に帰る三日前にされることになった。

その夜会で「ひりやう」の「ヴィングリー」国に残ることのできる姫たちの発表を行うらしい。

私はこの三週間一度もレンゲルド様にお会いしてすらいないので、完全に除外である。

しかし、夜会でやつとレンゲルド様にお会いすることができない。

喜んでここに参りませう。ここに参りませう。

もう一度会えたら、このままどうなるか変化するのでありますか。

このとき私は、アンナが準備してくれてあるドレスをほんやりと思
い出しながら、夜会ではいかに立たず、レンゲルド様を見る（と
こつよリ観察する）ことが出来るかを熱心に考えていたのであった。

念のためここに参りませう。

私はけつしてストーカーではないだ。

第八話 夜会の衝撃（前書き）

あばあばお気に入り件数が900件を超えた記念に思わずハーゲンダッツを買つてしましました。やばいリツチ！

本当にありがとうございます。

第八話 夜会の衝撃

夜会当日の夕方、後宮は荒れに荒れていた。

少しでも王の側室になる可能性のあるものはみな、ほかの女よりも目立つもの、高級なものをと殺氣をとばす勢いでアクセサリーやドレスに入れていた。

逆に気合をいれすぎているものもあつたが、みなさすがは大国の姫というべきか、後宮内を夜会用のドレスをきて闊歩する様子は大変華がある。

赤、群青色、黄色に桃色と曰がチカチカしそうななかで、私のドレスは若草色で印象が薄くなるようにつくられていた。

自分としては、目立たずに王をみることができればいいため、ベストなドレスなのだが、ほかの姫君たちは気に入らなかつたらしい。

「あなたをみた最初から思つていたけれど、貧乏貴族は貧乏貴族なりに、もう少しどレスの修正でもしていらしたらどう？あなたの衣装で側室候補みんな地味だなんて思われては恥になりますわ。」

「あなた一人いるせいで、一気にまわりの景色の華やかさが損なわれてしましますわ。どうせ、側室として名前を呼ばれることはないでしょうし、さつやとかえられたらいかがかしい。」

この一人は、最初にこそこそと嫌みをいつてきた一人である。

キィール国アシュレイ・サウンダリットとゾラン国サリー・

リンストン。

アシュレイは赤茶色の長い髪をウェーブさせており、少しキツめな顔の美人で、サリーはすこしきすんだ金色の髪をお団子のように頭の上におさめている可愛い系だ。

どうやらこの二人に皿をつけられているらしい。

アシュレイはふん！と鼻で笑うと、さつそつと華やかな方へと歩いていく。

サリーは「コーコー」と笑いながら

「はやく帰り支度をしてきたら？」

と毒をはいて、アシュレイのあとを追つていった。

正直、下級貴族はここまで差別をうけていたのか、と驚く。

なぜ人々は階級で人のランクを決めつけてしまうのだろうか。

そしてなぜ簡単に人を見下すことができるのか、私にはまだわからかねていた。

上に立つものとして情けない限りだ。

なにはともあれ、夜会は開かれる。

壮大なる音楽と共に人々は優雅に踊る。

しかし私はそれとなく混雑する場所をさけ、見事壁の花になる」とに成功。

笑顔でこの国の大臣たちと踊る側室候補たち。

しかし、それが作り物の笑顔であり、最後のチャンスまでのがさないという捕食者のように、目が輝いていたのを私はしつかり確認した。

側室候補の人たちは全員大広間の中にいるし、すでに大臣たちもそろって各自飲み食いなどしているようだった。

だが、肝心の主役であるレンゲルド様はまだこられていないようだつた。

いつも一緒にいる宰相様もいない。ちなみに、八年前レンゲルド様のお付きをしていたのは彼だつたらしい。

その一人がいないことは、さすがに変だ。

夜会はもうはじまっているのに・・・。

そういえば、今日だれか呼ばれていると、数日前にほかの側室候補が話していたのだが、だれだつたろうか。

その人物のせいで遅れているのか？

と不安になつた途端に、大きな音と共に開かれるドア。

あまりの勢いに貴族や側室候補たちは動きを止めて、大きく開かれたドアを見る。

そこにいたのは、息をみだらせ、息苦しそうに呼吸を繰り返すレンゲルド様の姿があった。

思わず胸がきゅっと縮まる。

ああ、ますます胸が高鳴つていいく。

初めて見た時よりも、八年ぶりに彼を見たときよりも、さらに大き
く、苦しみをともなつて。

これは、恋なのだろうか？

いや、もう少しとことん見たいからな。

もう、彼を考えるだけじゃ満足できなーいのだと、今潔く認める。

彼を見つめるだけではもひダメなのだ。

もつと。もつと・・・と思は、今現在彼を見つめることで貪欲にレ
ンゲルド様を求めていく・・。

しかし、一方のレンゲルド様は夜会を楽しむ様子もなく、慌ただしく側室候補の顔を見て回っている。

ここまで必死な様子は大臣たちも初めてだつたのであらう、口をあんぐりとあげながら目を見開いて、レンゲルド様の意味不明な行動を見つめている。

しかし、私は、彼の必死な様子を直視できなくなってしまった。

彼は誰かをさがしている。

ずくっと、胸が張り裂けそうに痛くなる。

そう、彼にはもともと想い続けている人がいるとの噂があった。

だからこそ、私は彼に会つだけで十分だった。

・・・十分なはずだった。

どうやら、彼の最愛の人は、側室候補の中にはいたのだろう。
でなければ、普段冷静沈着、冷えきった王として名高い彼が汗を流
しながら人をさがすだなんてありえない。

自分の恋心の深さを気づいた瞬間に失恋とはなんとまあ滑稽なこと
だろうか。

彼を見るだけで満足できるなどと、よく叔父にいえたものだ。

今の彼の姿を見るだけで、顔もわからない彼の最愛の人にはほの暗い
気持ちを感じてしまうのに。

もう、そんな彼を見続けるのは、あまりにきつかった。

大広間にいるすべての人たちが彼を見る中、私一人だけそつと背中をむけ、大広間をぬける廊下へと歩いていく。

誰もそんな私を気にもとめない。

そう、これでいい。

今までどおりの生活にもどるだけだと私は私を説得する。

「あ、ごめんなさい。」

前をよくみてなかつたおかげで、人だかりにぶつかり、体が大幅によろめく。

視界に彼が見えそうになるのを、ぐっとおさえて、ゆっくりと歩きだした。

が、その瞬間激しいほどの方で後ろから強き抱へよひに抱きしめられる。

余りにも突然の抱擁にびくりと固まる体。

はあといつ艶やかな安堵のため息が自分の耳のすぐそばをくすぐる。

なにが・・・起きたのだらつか?

状況の把握もできないなか、今度は体を横抱き、つまりお姫様だけをするよつにせぬあげられ、足が宙につく。

悲鳴がでそうになるのをおそれて、こんなことをする不届きものはどうだと、顔を確認した瞬間、思わずピシリと体が固まった。

「ルドヴィリー王弟殿下、これで約束を果たしていただけますね!」

これは夢だらうか。

わいせうと光が舞う。

田の前にあるのは、幼き日にみた、キラキラの笑顔。

眩しくもあり、ずっと欲しかった笑顔が、いま田の前にある。

そう、私を抱き上げ、ルドヴィリー王弟殿下……私の叔父に何かを宣言しているのは、私の初恋の相手であるレンゲルド様だった。

混乱する頭の中で、叔父の一コ二コとした笑顔が妙に印象的だった。

第八話 夜会の衝撃（後書き）

次からはレンゲルド編です。

第九話 レンゲルドの恋（前書き）

おおおおおお氣にいり1500件突破ありがと「アレコ」ますーーー！

レンゲルド様の恋を応援してやってくださいませ。

第九話 レンゲルドの恋

一日忽れだった。

引力の「」とく引き寄せられた。

これは運命だと、当然のように思えるほど、彼女に惹かれた。

そうして13歳となつた俺は、初めての恋におちたのだった。

シュバルティ帝国。

この国は、俺の国も含めてこの大陸の頂点に立つ国だ。

戦で頂点にたつたわけでも、貿易で頂点になつたわけでもなく、ただ神に愛されている国として私たちは敬い、尊敬している。

いつから建国したのか、シュバルティ帝国の歴史書にしかのつてな

いほびど国よりも長い建国年数は、この大地を神が作りあげた時期に、神による祝福によつてヒトが生まれ、そのヒトたちが建国した最初の国なのだといふ伝説の意味づけをしてゐる。

そんなシユバルティ帝国の創立記念祭が行われるとあつては、各国の王族たちが総出で参加するのも当たり前だと言わざるをえない。

そんな中、シユバルティ帝国の創立記念祭に参加していた俺は、不機嫌が最高潮にたつしてゐた。

創立祭がめんぢくせかつたからといふのもあるが、俺の弟・・・もつすぐ三歳になる・・・が迷子になつたらしいのだ。

自分の後ろにいるだらつと、歩く速度には気を付けつつ、時々は後ろもみていたのだが、一瞬氣を抜いたすきに居なくなつてしまつたのだった。

一応、弟に付いている護衛も一緒にいるので、誘拐などの心配はな
いが、護衛は弟の後ろに付いていくばかりでなく、しつかりと弟が俺についてくるようアシストしろよーとイライラをつのらせていた。

「おিロンファイル！俺はヴァインを迎えて行く！もう我慢ならんぞ！」
「あなたがいくとわざわざこじくなりそうなので、素直に待つて
いてください。」

俺の付き人であるロンファイルに抗議するも、一殴一殴とした顔で頭

を横にふりながら毒をはく。

「いつ・・昔から俺のお世話をしてるからいつも少し言こと方つて
もんがあるだろ？・・・。

しかし、そういう人間が周りにいることが大切だとこいつともよく
わかるふん、なんともいえない気持ちになるのだ。

だいたいヴィンが探検したいなどとこいつから・・・いやそもそもこの
創立祭にくる人間の数が異常なんだ。

こんな騒々しいなかでやはりヴィンに歩かせるんじゃなかつた。し
かしどうこするといふと、自分で歩くといつてきかないし・・・。

もんもんと考え事をしていたといふ、

「レングルド様。ヴィンリント様がござれましたよ。」

ところづの言葉が聞こえてくる。

思わずぱっと前をむくと、トコトコと音が聞こえてきたやうなほど
たどたどしく歩くヴィンの姿が田に入つた。

思わず走り出さと、ヴィンもこちぢり泣いたようすで、満面の笑み
を浮かべている。

お前一どんだけ俺が心配したかも知らないでーと思つも、頬が緩む

のが抑えられない。

結局は可愛いと思つてしまい許してしまつだから、弟といつもの
はタチが悪い。

一気に駆け寄つてその勢いのままだつこする。

わやつわやと笑つ弟に、思わず笑みが溢れる。

さて、そろそろ親のもとへ戻らなければ・・・と軽く周りを見渡し
たとき俺は衝撃を受けた。

俺の目線の先には、シユバルティ帝国の王族、または王族に招待さ
れている貴族たちが一様に座つていたのだが、その中でも中心の方
に座つている少女にどうしようもなく惹かれた。

髪はシユバルティ帝国独特の透明といえるほどキラキラと光る淡い水色の髪で、年は俺と同じか、年下ぐらいで、全体的にほつそりとした優げな印象を受ける。

けれど何よりも俺が惹かれたのは、その子の表情だった。

ほんのりと赤く染まる頬と、すこしうつむいて、両頬に手を置いて赤らむ頬を抑えようとしている仕草がなによりもぐっときた。

顔の表情が無表情に近いのに、ほんのりと赤く染まる頬と、目が少し潤んでいる姿は本当にたまらない。

その目を俺に向けて欲しい。

俺を見てくれ。

そう思つてゐる自分になんの疑問も浮かばなかつた。

運命だと、がらにもなく思えた。

あの少女は、俺の最愛なのだと。

一目惚れだった。

そして、俺は彼女を手に入れるためならばなんだつてしてやると決意した。

第十話 レンゲルドの焦躁（前書き）

大変！ たいつへんおまたせいたしましたあああ！！！

本当に本当にごめんなさい。

遅くなつて本当にすみません。

テスト終わつた！ 夏休みに突入！ といつわけでもらいまさと更新して

いきたいとおもいます。

感想をくださつたかたも、返信が遅くなつてしまいもうしわけありませんでした。

第十話 レンゲルドの焦躁

「にてーたま?」

はつと氣がつくと、目の前には俺の付き人のロンフィルと、ワイン。

きょとんとしたヴァインを思わず見つめる。

俺は一体どのぐら^こうほづけていたのだろうか。

ロンフィルは今まで誰かと話していたようで、その相手はもう背中を向けていたが、ロンフィルはおじぎをしたまま止まっている。

相手はどうやら随分と身分の高い者ようだ。

あの光り輝く髪はシユバルティ帝国の王族の血筋の誰かだと、推測できる。

ああ、あの少女も、とても綺麗な髪をしていた。

腰まで伸びる髪は、思わず手を伸ばしたくなるほどだ。

また、あの少女を見てしまったたら、今度は本当に囚われてしまつのではないかと思うと、ふるり・・・と体が歓喜する。

なんとこゝことだらうか、一国の皇太子が、少女に囚われるることを望むなど…。

しかし、衝動は抑えることなどできない。

「ロンフィル。あそこに座っている少女はどこの貴族かわかるか？髪が王族特有のものだから、身分もそれなりに高いと思うが……。」

そんな俺の言葉に目を見張るロンフィル。

そのあと、ため息をはき、「あの人もひどい人だ。」とつぶやくと「いまや皆席を自由に歩いているようなので王族との区別も難しいですね。」

といった。

「……そうか。」

いや、分かつてはいたが、どうすればいいものか。

名前だけでもしることができたら、国に帰つてすぐに許嫁の申請を取りたいのだが……。

「少し、リリの国に住んでいる奴に聞きにいくてくる。」

「ちよーーーじほん。レンゲルド様、私が行きますので、あなたがたは、早く王と王妃のもとへ戻られてください。そろそろ心配されるでしょうから。」

この場所を離れるのは本当に嫌だった。

まるで引き裂かれるようだ。

せめて話しかけに行きたかったが、すでに一度、家族全員で挨拶にいっている。

大陸全土からくる大人數をうまく裁くためには、一回限りの挨拶が決まられているのだ。

あの壇上にあがるのがもう少し遅ければ・・・と悔やむが、もうすきしたことだから仕方がない。

何度も何度も彼女の姿を振り返りながら、後ろ髪が惹かれるビーナスかぐいぐい引っ張られるぐらいに感じながら、俺はしぶしぶ家族のもとへと帰つていった。

このときロンフィルは誰としゃべっていたのか、そしてなぜ、ロンフィルは俺が彼女のことを聞きにくいくと言つたとき焦つていたのかもつとしつかり考えておけば、長い年月を切なく過ごすこともなかつただろうにと今なら思つ。

しかし、その措置が正しかつたのだといふこともわかるから、なんともいたたまれないのである。

「なぜだ！なぜわからない！」

俺はこのとき怒り狂っていた。

なぜならば

「水色の髪ー創立祭の時に王族と貴族の席に座っていた少女ーそれだけあれば情報などこくらでもとれるであろうーなのになぜ名前すらわからないのだ！」

そう、彼女の情報がまったくといってないのだ。

いや、ただでさえシユバルティ帝国は鉄壁といいうわれを持つほど強固な警備と、古代の魔術師とかいう奴の結界で守られている。

いいかえれば、外からシユバルティ帝国を無理やり調べるなど無理があるので。

すべての情報源はシユバルティ帝国の住民、または滞在をゆるされた旅人などのひとにぎりのみ。

そして彼らはシユバルティ帝国にとつて悪い影響になると思われる情報をけつして売りはしない。

どこの国よりも建国が長く、どの国よりも忠義心の厚い国民をもつ国。そのような奇跡のような国がシユバルティ帝国なのであり數ある人間たちが崇拜する国なのだ。

しかもこの大陸において、シユバルティ帝国に恩義のない国などいない。

建国するのを影から支えてもらつたり、あまりにも非情な戦略にまきこまれそうになつたときに助けてもらつたり、世界大戦になりそうなほど戦争が大きく膨らんだ時にそれぞれの国の仲介をし、ことを丸く収めたのもシユバルティ帝国だ。

つまり、表立つてシユバルティ帝国に敵対するような馬鹿な国はないのだ。裏ではわからないが

そして少女のことがわからないということは、情報をくれる人間たちは、その少女の情報が出回ることがシユバルティ帝国に悪い影響をあたえるという判断をしたということだ。

「一体だれなんだ。彼女は・・・。」

だれか。

彼女のことを探りたいといつのこと。

自分が一番彼女のことを探りたい、そして彼女を誰の目に触れない場所へ隠してしまいたい。

激しい焦燥とほの暗かな気持ちが俺の胸をつつむ。

こいつしている間にも、彼女がだれかと結婚の約束でもしてしまったらと思いつと気が狂いそうだ。

彼女が俺以外の男の妻となる前に、彼女との未来をどんな形でもいい、約束できるものが欲しい。

お願いだから。

彼女とつながる橋をくれ。

第十一話 レンゲルドの無知

あの創立祭から一年が経つた。

俺は14歳になり、体つきがどんどん変わっていくのが自分でもわかつた。

そして、俺にくる縁談の話も、多くなってきていた。

けれど、その現実的なものを遠ざけるように俺はひたすら彼女のことを考えた。

彼女は、俺と同じように成長して少女ではなくなる。

いずれ、少女から大人の女へと変わっていく。

それが本当に怖かった。

彼女も、俺と同じように縁談がきてくるのだろうか？

焦りはどうでもいいことをじりり、日に日に心を真っ黒に染め上げていく。

だといつのに俺をあざ笑つかのように、少女の情報はなにひとつでてくることはなかった。

王になるために必要な勉強も、体を鍛えることも心ありのまま、この国の王になるという意味を考えることも漠然としたまま、一日はすぎていった。

そんな、焦るばかりの日々が続いたとき、俺にとつて素晴らしい朗報が入ってきた。

なんと、あのシュバルティ帝国の王弟殿下であるルドヴィリー殿下が、この国に視察にきているらしい。

いつも秘密裏に調査しては、調査しおわってからとぼけた顔して國に挨拶と評して國の現状を伝えにくるという殿下のうわさに思わず浮き足立つ。

俺の国、ヴィングリー国は大変恵まれた地域だ。

海と山のどちらもが國の領土内にあり、自然による厄災もほとんどない。

雨も定期的にふり、暑すぎることもなく寒すぎることもない快適な温度に、森に行けば豊富に取れる果実。

しかし、このあまりにも資源が豊富なことが、かえつて國を危機へ

とおこやつてこむ。

この国をはさむよつにしたつ一つの国、キィール国とベジラン国とは長い間緊迫状態が保たれていた。

50年に一回ほど大きな戦いがあつては引き分けるよつにして条例を結ぶ。

そしてどちらかがその条例を裏切るのか、常に緊迫した状態で監視をし合つのだ。

本当ならば、資源の豊富さによる海と山からの貿易が素晴らしいこと言われるはずが、それよりもまず、隣国との戦いに対するための軍隊の強さが田に入るよつになってしまった。

そんな危険と隣合せの国だからか、よくシユバルティ 帝国から視察がくる。

そして今回はなんといつても王弟殿下だ。無礼にあたることがないようにしつつも、自分の気持ちを伝えなければ。

そしてただの口約束だけでも、しないよりは何倍もいい。

ヴィングリー國の王子が、シユバルティ帝国の少女と結婚をしたがつているとの認識さえあれば、なにかしらの情報ももうえるはずだし、シユバルティ帝国からもなにか返事はいただけるはず。

この時の俺は本当に甘かった。

自分の感情を抑えることもできず、それが周りにあたえる影響を考えることもできない、ただのガキだったんだ。

そしてそんな俺に王弟殿下が少女の情報なんてくれるはずがなかつた。

「その話、お断りいたします。」

シユバルティイ帝国の城にルドヴィリー王弟殿下がきて、密室にいるのだという話を聞いてから俺は部屋を飛び出し、王弟殿下に会いに行つた。

そして自分の気持ちをつたえた・・のだが、俺ははじめ、なにをいわれているのかわからなかつた。

自分では、丁寧に、相手の気分をそぐわせないよじこと氣を遣いながら話したつもりだつた。

俺が創立祭からずっと、見かけた少女を忘れられない」と。

その少女のことが知りたいが、なにもわからないので、なにか知らないかということ。

そしてその少女と婚約を結びたいということ。

それがどれだけ無神経なことをこいつているのか、俺は全く分かつていなかつた。

「君はなぜ?」といつ顔をしていましたね。」

お茶を飲みながらにっこりと笑う王弟殿下に呆然と顔をむけるしかない俺。

「君は無知だ。その無知などいら、僕はすぐくいこと思つ。まだ何色にも染まつていないとこでもあるからね。

ただ時として無知は何事にも耐え難い悲劇を生むこともある。

君はシユバルティ帝国の貴族の誰かが、違う国と婚約を結ぶことによる混乱を考えたことはあるかい?」

ただただ、俺はその言葉を何度も何度も頭の中で繰り返しながら、ルドヴィリー王弟殿下をみつめる。

彼ははあ、と大きなため息を一つついたかとおもひと、

「その意味を理解したと思う頃に、またこの国を訪れるよ。僕はただの馬鹿な男にあの子を嫁がせる気はないからね。

自分がなにをしたいか、なにをすればならないか、自分で考えなくては王になるのもおこがましい。」

ぐさつと、胸に楔が打ち込まれたようだった。

彼は彼女を知っている。

俺が何度も何度も望んだ、彼女との橋が、今日の前にかかっている。

そして彼女とつながりを持つものに今俺は失望しかけられているのだ。

かのシユバルティ帝国の王弟にして王になるのもおこがましいと言われるほど自分は無知なのだと。

どうやって彼の部屋からてきたのかすら、覚えていなかった。

ふらふらと、自分の部屋にはいつ、彼からの言葉を思い出し、自分が彼に言った言葉を思い出して、恥ずかしそうで死ぬかと思った。

けつして小さくない、軍事国といわれている国の皇太子が、のちに国民を背負い守らなければならない未来の王が、王になるのもおこがましいといわれたのだ。

恥ずかしくて、悔しくて涙が止まらなかつた。

執事やメイドたちにきこえないよつ、ロンフィルに聞かれなつよつ、ベットに顔を押し付けて、声を押し殺して、それでも涙は止まることなく、彼女へ溜まつていた黒い気持ちがでてきたかのように長い間流れ続けた。

自分は今まで何をやつていたのだろうか。

彼女とつながることばかり考え、想像ばかりして、なんといつ無駄な時間だつただろつか。

その想像には未来がないのだ。つながつたその先はなにも考えていないといつ愚かさ。

この無駄な一年があれば、彼女を受け入れ守るために人脈をつくることができただろう。

一年あれば、今以上に彼女を守るための体を鍛えることができただらう。

シュバルティ国の人間、特に水色の髪を持つ者と婚姻を結ぶといつことは、そういうことなのだ。

シュバルティ帝国という鉄壁から単身で彼女はでてくるのだ。

シユバルティ帝国に狂信的な思考をもつものたちは、そのよつた獲物を逃すはずがない。

彼女を必ずや連れ出し、自分の国で一生過ぐしてもらおうとまわして脅威的に迫つてくるだろう。

完璧に婚姻を結んだあとは、さすがにそういう輩も減るだろうが、婚姻が成立するまでの間、彼女は「ほかの国に嫁がれるぐらいなら」という理由で襲つてくるものたちから身を守らなければならぬ。

それほどまでに、かの国に傾倒する国、集団、民族が大勢いる。

自分がなにをしたいか・・・なにをすべきか。

自分がしたいことは、一年前からかわってはいけない。

ただ、そのあとなのにをすべきかは、これからやつていかなければならぬ。

彼女を守るための地位を・・・力を、そしてこの国に嫁いでもらう

ためのメリットを、俺は一からつくれなればならぬのだ。

第十一話 レンゲルドの疾走（前書き）

たいつへん遅くなりましてすみません。

少しずつでも更新しなければと思い、申し訳ないほど遅くなりましたがレンゲルド編更新いたしました。

とりあえず、レンゲルド編の下書きは終わっているので、手直しつつ、更新していきたいと思います。

第十一話 レンゲルドの疾走

やらなければならぬことはそれこそ星の数ほどあった。

まず、人脈をつくるために他の国への短期留学をすることを父に求めた。

自國での人脈も当然つくらなくてはならないが、俺にはロンフィルと弟のヴィンがいる。

彼らは自分にとって唯一無二の存在であるし、彼らつながりで人脈をつくることができるため、ひとまず自國のことは彼らにまかせるとして、俺は他国にいき、様々な技術、学力、武力、帝王学などを学べるだけ学ぶことに専念した。

月日は光のようにはやく流れる。

俺は文字通り死にものぐるいでさまだな」とを学び、吸収していく

た。

そしてそれと比例するかのように、俺は冷静沈着で冷えきった男という印象を人々に植え付けていった。

赤の他人とくだらない会話をする暇があるなら、ひとつでも多く国の成り立つ方法を学んだし、体を鍛えることに集中した。

自分を追い込めば追い込む程に、表情は固まつたかのように無表情になつていつた。

影で仮面をかぶつたようだと恐れられても一向に構わなかつた。

幸い、弟は自分に似ず、誰からも好かれるような性格だつたし、表情も口々口々とかわり大変愛くるしいと様々な人間から好意をもたれている。

将来、この国の外交は弟に任せられると思えるほどに、弟は人との接し方をよく心得ていたし、頭の切れもいいことから周囲からの信頼も絶大であった。

普通ならば、ここまで自分より秀でた弟に対して嫉妬心などをもつてゐるが、俺に足りないものをもつてゐる弟がいることを、俺は心の底から喜んだ。

自分に足りないものは、どうあがいたといひで簡単に満たされるものではないし、あがくだけの時間など俺には惜しい時間であった。

その足りない部分を補ってくれる存在が身近にいるという奇跡。

これは、ヴィングリー国を将来安寧に治めるためには、必要不可欠な奇跡であった。

そのように割り切った考えができたのも、ひとえに、ヴィングリー国のメリットをひとつでも多く増やそうと、こう考えで思考が埋まつていたからであるのだと考へると、自分の思考回路の単純さに少々苦笑いしてしまう。

そして、ある日、ついにその時はきた。

父が重い病気にかかり、倒れてしまったのだ。

ベットから起き上がることも困難になり、それを秘密裏に知った隣国の動きが比例するかのように怪しくなっていく。

状況はまさしく戦争の一歩手前まできていた。

そして、俺は病に伏した父からの命を受け

この国の王となつた。

いまから、約2年前のことである。

そして戴冠と同時に両隣りの国からの襲撃を受け、祝福の宴などもないままに俺は戦争を収めるためにひた走ることになつた。

俺には確信があった。

この戦争を、ヴィキングリー国に有利な状態で終戦をむかへることができれば、他の国から、俺は王として一日おかれる事になる。また長年引き分けで終わった隣国との関係を変えさせることが出来たならば、ヴィキングリー国の評価も上がる。

なにより、戦争に勝つことで、ヴィキングリー国の貿易は盛んになり、ますます大国としての地位が築かれていくだろう。

この戦争は俺にとって、予想外にも願いを叶えるための踏み台になつた。

できるだけ早く、できるだけ被害を出さずに戦争を終わらせるために俺はひたすら戦いの最前線にいき、直接指揮をとり、勝利をもぎ取つていった。

勝ち星が増えたことに、俺に対する評価が高まつていぐのを実感していった。

本国の民や、戦争に赴いた兵士達からの期待と信頼、他国からの感

嘆と驚異がヴィングリー国をますます強く、大きくしていく。

そして、一年の攻防のうちにヴィングリー国は完全なる勝利をおさめたのであった。

これまで数百年と続いた隣国との対等な関係が、たった一年のうちにぐずれさつた。

これはまさに歴史的戦いとして、ヴィングリー国の歴史の中に大的に刻まれることになり、総指揮をした若き王の戦いぶりも、長年にわたって熱く語り継がれことになるのだが、俺にはそのことを気にする余裕はなかつた。

ヴィングリー国がこの戦争で勝利をおさめたからといって、他の国との位置関係がどうなるのか不明なために、手放しで喜んでなどいられるはずもない。

これから、地道に他の国との関わりをつなげていくはずだったのだが、ここで、俺の計算は少し狂うこととなる。

第十二話 レンゲルドのため息

「后だと？」

その話は戦争が終わってあまり間がたつてないころに、大臣たちによつてもたらされた。

「今は戦争の事後処理で忙しいことはお前たちも重々承知しているだろ？ なぜわざわざ厄介事を増やさねばならない。」

ただでさえ冷酷、無表情といわれている俺の顔がますます固くなつていくのを、冷や汗をかきながら大臣たちは見守つていた。

生睡をぐくりと飲み込み、大臣の一人が勇気をもつて言葉を続ける。

「はい。それはもう承知しております。しかしながら、この戦争の勝利はこの国を揺るがすほどの出来事なのであり、それを成し遂げた王の祝福を、国の者たちは今から待ち望んでいます。もちろん、私たちですが、この国を平和にしてくださった王に、今度は幸せになつていただきたいと国民みんなが考えてゐるのです。」

俺にひとりと見つめられ続け、滝のように汗を流しながらも、その大臣は一步も引くことなく、俺を説得し続ける。

「・・・今、戦争に勝った国として我が国は周囲の国から注目を浴びている。この機会に、他の国とのつながりを強くする・・・か。」

俺の抑揚がない、淡々とした声で言われた内容に、大臣の顔は青を通り越して真っ白になっていく。

周囲の大臣たちもみな一概に顔をひきつらせていく。

俺がなにを思っているのかわからない分、怖いというのもあるのだ
うう。

そこまで恐怖を持つしていてもなお提案してきた勇気には評価したいな、と今話していることとはまったく違うことを頭の中で考える。

「よつは、俺を使って他の国を引き寄せるとこつひとつだな。」

「そんな...王を使うなどと...」

王の言葉に思わずといつたふうに一人の大臣が声を挙げる。

「王は、長年他の国とのつながりにこだわっておいででした。この機会にパイプをつくることはたやすく、今ならばどの国からも王妃や側室の縁談をいただけるでしょう。」

その言葉を聞いて、俺は一度、ふむ、と答える。

たしかに大臣の言葉には説得力がある。他の国とのつながりは俺個人としてもつけたい。

俺が思い続けている彼女の話を彼らにするつもりはないが、このまま縁談を破棄するとなると、たしかにこの国にとって進歩はないに等しい。

せつかくのつながりをこのまま捨てるのか？

しかし、縁談などがきていたとしても、俺は彼女以外を王妃にするつもりもないし、側室もいるだけ無駄だ。

なにより、つながりをつけてこの国のメリットを増やしたとしても、彼女を手に入れることができなければ意味がない。

そう、頭の中で考えたとき、自然と答えはでていた。

「やはり、縁談は見送る方向で考えておけ。いまは戦争の事後処理が先だ。」

彼女が俺の原動力であり、物事をするにあたっての比較対象なのである。

彼女に有益のあるもの、彼女を手に入れるために必要なものを一番に考える。それが今までの俺の行動の中心であり、今後も変えることはない、俺の信念である。

」の信念は揺るぎない」とはない。そう、思っていたのだが……

少し、甘かったらしい。

大臣たちはあの日、一度はひいたが、その後毎日のように俺のもとに訪れ、しまいには父や母、今年11歳になる弟に宰相のロンフィルまで味方をつけ、俺のため、国のためにと語り続けた。

それはいつの日からか、俺への愛がどれほど強いかに話がかわってゆき、尊敬しているからこそ、幸せになつてほしいなどと泣きつかれる羽田になつていった。

王である俺に忠誠を誓つてくれてこゝの手前にござんざつに扱うこともできず、日替わりで訪れる大臣たちに俺はどうとう妥協案をだし、この騒々しい日々をなんとか終わらせたのであった。

女たちが集まつたホールを見渡して、思わずため息を吐きやうしな
るのをグッとこらえる。

俺は一体なにをやつているんだと、頭を抱えたくなつてきた。

しかし、これは大臣たちとの攻防の末に妥協した案なのだ。

そして、各國の姫たちがいる中で、我が國の心象を悪いものにして
はいけないと、身を引き締めなおす。

軽く挨拶をすると、光り輝く女たちの目。

なぜこんなにもみな捕獲者のような顔をしているのだろうか。これ
ではひとつかかるはずの獲物も逃げてしまつに決まつてゐる。

ああ、彼女に会いたい。

ただ一言が頭をよぎり、無意識のうちにため息がでていた。

その彼女がまさか、この中にいたなんてことは露知らずだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0035u/>

愛しいとおもう

2011年11月9日19時53分発行